

—— 普及技術の広場から ——

ある技術を、地方に、部落に、そして農家個々の田に畑に普及するということは、非常に多くの困難を越えねばならない。その上、変転の多い現代の流れは、ひとつが徹底しないうちに、もう次のものが新しく覆いかぶさつてきて、前の施策をおし流そうとする。しかし、農家の正しい魂の結末に、地味な、ねばり強い挽りどころをあたえるものは、何といつても農業技術であろう。したがって、その普及には科学的な正しい見通しとともに、やりぬこうとする強い心の姿も要求されよう。そして多くの問題が提示され、悩み、もたえ、反省する。地をあゆむものの、こうした姿は、何時の世に於ても尊い。この欄では、みんなで問題を出し、みんなで苦しみ、みんなで研究し、そして、みんなで救われて行こうではないか。(編者)

実態のつかみ方に問題がある

——ある技術普及施策からの反省——

藤 畑 孝 正

(富山県庁農産課)

富山県の農家は珍らしがり屋で、新しい技術にばかりとびつきたがると、よく他国の人に批判される。案外そうかもしれない。私は、こうした県で15年も同じ仕事をしているが、最近、農業試験場に対する農家の信頼が益々強くなっているのを見ても、新しいもの好きの傾向が正しい道を見つけ自発的にのびてきたひとつの現れとも見られよう。先輩がたの話によれば、昔は試験場に対しても非常に批判的であつたと聞いているのであるが——。さて、人間誰しもフトコロにとびこんでくれれば話し易くなるし、真意も通じ合えるから理解も早くなり成功も早くなる。この意味からも、今後は、技術研究と普及事業とはしつかりとプログラムを組んで農家の技術を組み立ててやることを忘れてはなるまい。と、いつても、新しいものばかり入れようというのでは決してない。古い技術は古い技術なりに農家に浸透している理由があるのであるから、いたずらに古物あつかいをすべきではない。いつたい技術の導入というものは地域的にかんりの相違がみられるが、これを成功させるためには実態とそのつかみかたが大切である。

普及事業発祥の当時、本県のジャガイモ作付面積は約3,000町歩であつたのに現在では半減している。ジャガイモで困るのはエキ病による惨害である。当時、東海近畿北陸6県の農薬資材会議などもあつて対策に

腐心したものである。岐阜県平地ではバレイシヨの生育が富山県より1カ月も早いので、それを指標として発病蔓延を予測したものである。最近ではエキ病に大変強い「クネベツク」という品種が普及されているが、極晩生型で、7月下旬でないとならぬ収穫できないため、水田前作には不向で、畑作地帯に作られているため、水田前作には従来の「ダンシヤク」が作られている。そのころ、エキ病に対して6斗式石灰ホルドウ液と銅6%粉剤の効力比較試験が行なわれ、その結果、平坦部は液剤、畑作地帯は水の不便を考え粉剤という常識的な観念普及の方針を決めた。ところが、この薬剤の使用形態は全く普及方針と逆になり、平坦部には粉剤が、畑作地帯には液剤が普及してしまつたのである。そこで、なぜこのような結果になつたかについて現地調査を試みたわけである。畑作地帯といつても、奥羽山麓地帯のように丘陵畑作のところと、山間地の山畑とはもちろん区分けしなければならない。丘陵畑作地帯は古くから富山市への野菜給源地であつたから蔬菜栽培が進んでおり、各戸に小型噴霧器が備えつけられているので液剤の方が応用に便利な実態にあつた。また、山畑地帯の実態は、実に複雑なもので、山村農家の経営観念というものの基礎は、自己労力はどんなに苦しく使つても金銭支出を嫌うということから成り立っているようである。ところが、液剤は粉剤に

比べると価格はわずかに安く、効力は良いのである。そして山村ではエキ病による惨害でひどい目に遇っているため、谷間の水を汲み上げて液剤の撒布を励行したのであつた。この点について、吾々は粉剤を使用すれば能率的な点と労力を節減できる利点を考えたのであるが、これは実態のつかみ方が不備だつた結果となつた。

その一方、平坦部では水にはこまらないという利点はあるにしても、田植えや麦刈りなどの作業が重なるために、手数のかかる液剤撒布はきらい、手つとり早い粉剤使用が普及してしまう結果となつて、吾々の立案とは全く逆なことが現出したのであつた。

このように、ただ、試験成績と、常識的な判断によ

つておし進めようとするのは、はじめから逆コースにぶつかるようなこともあるわけで、農家の慣行実態とその土地に住む村民性ともいつたものをよく知つて、それに合わせた判断を行わないと、いかにきれいにスジミチの立つたようにみえる技術でも普及方針を狂わせてしまうものである。純技術的な面に於ても、まず被害実態をとらえることが先決で、防除の面からは耕種的な肥培管理を通して作物の一生を熟知し、最も収量を左右する時期と病虫害の発生環境をおさえて、それに合致するように除害作戦を組み立てるべきものと考えられる。技術の普及場面では、実態のつかみ方に問題がある——ということを感じている次第である。

原因の確認が更生の基礎

—カキ園の荒廃を救う—

石橋謙吉

(福井県坂井地区農業改良普及事務所)

福井県坂井郡芦原町佛徳寺に20町歩のカキ園があり、富有が植えられている。いまから25年前にあたる昭和5年に、約370本が植えつけられ、当時の試験場技師によつて引つづき熱心な指導をうけたので、7～8年後には立派なカキ園を形成し、昭和11年12年ごろには満州にまでも輸出したほどであつた。ところが、それほどのカキ園も、戦時に入つて、肥料は統制され、農薬その他資材の入手は困難となつたので、いきおい園の管理も行われなくなつてきた。そのため、タンソ(炭疽)病やラクヨウ(落葉)病、カキヘタムシなどがふえてそれらの巢窟のようになり、ついには荒廃して、1昨年までの15年間には1度も結実をみないというひどい変りようになつてしまつた。そのために、部落の人たちは園を廃棄しようと思ひ、昭和28年には120本を伐採してしまつたのである。私はその年の6月に赴任した。そして、このカキ園の生い立ちを聞き、結実しない原因を究明しようとし、とりあえず伐採を中止してもらい、くわしい調査をしようと呼びかけた。それ以来、秋までの間に数回現地調査を行つた結果、結実しない原因として次の3点をつかむことができた。即ち、

1. 授粉樹がないということ。

2. 肥培管理が殆んど行われていないこと、特に、剪定整枝と施肥の関係が甚しく不合理であること。

3. ラクヨウ病、タンソ病、ヘタムシなどの病虫害が極めて多発していること。

がそれである。そこで、これらの調査結果を部落の人々に説明するとともに更生策を相談しその賛同を得たので、翌29年2月には塚本技師を招いて部落座談会を開き、さらに綿密な現状調査を行つて不結実の原因を一層確実に認識し、直ちに次の対策を樹立した。

1. 推肥 200貫、金肥の3要素をそれぞれ2貫づつ施肥すること。

2. 剪定整枝は3月中旬に終らせること。

3. 病虫害防除のため3月に石灰硫黄合剤、6月中・下旬に硫酸鉛加用過石灰ボルドウ液、7月上旬に過石灰ボルドウ液撒布を励行すること。

4. 6月上旬中、約1週間に亘つて人工授粉を行うこと。

5. 1結果枝に1箇を標準として摘果を行うこと。

以上の計画にもとづいて部落では真剣な実行がなされたのであるが、計画初年度に於てすでに1樹当りの平均収量は、大果(50匁以上のもの)6貫、中果(40匁以上のもの)3貫、小果(40匁以下のもの)6貫をあげ